

近代アジアを駆け抜けた 一人の巨大な日本人

本書表紙にある六つの古い建物の写真。いずれも大谷光瑞ゆかりの建物である。その建物とは、ウラジオストク（浦潮）本願寺、大連の本願寺関東別院、旅順博物館、本願寺上海別院、本願寺台湾別院、台湾高雄の光瑞別邸逍遙園である。これらは大谷光瑞が活動の拠点としたところであり、また収集物を寄託したところである。これらの所在地はアジアの広い地域にわたっているが、それは大谷光瑞の活動の範囲の広さを示している。しかしながら大谷光瑞の活動はこれら地域にとどまるものではなく、北は樺太から南はシンガポール、西はトルコまでにおよぶ広範囲なものであった。そのような大谷光瑞のアジア広域における諸活動について、その具体相と歴史的意义を詳論したものが本書である。

大谷光瑞（一八七六一一九四八）は、巨大な伝統仏教教団

野世 英水



A5判
382頁
勉誠出版
[本体 4500円 + 税]

柴田幹夫著
大谷光瑞の研究
―アジア広域における諸活動

である浄土真宗本願寺派（西本願寺、以下本願寺派）の第二二世法主（在位一九〇三―一九一四）を務め、また大谷探検隊（一九〇二―一九一四）を派遣し、アジア広域調査活動をおこなったことで著名な人物である。この大谷光瑞に関する研究としては、これまで大谷探検隊の活動や探検隊が将来した文物の歴史的文化的検討が主になされてきた。しかしながらその後白須浄眞著『忘れられた明治の探検家 渡辺哲信』（一九九二年 中央公論社）に代表される、探検隊の隊員個々の検討も進められてきており、また最近では白須浄眞編『大谷光瑞と国際政治社会』（二〇一一年 勉誠出版）や同著『大谷探検隊研究の新たな地平』（二〇一二年 同）も刊行され、国際政治社会との連関における新たな大谷光瑞像や大谷探検隊の活動についての研究もなされてきている。そしてこのよ

うな研究状況のなか、さらに大谷光瑞個人の研究も進められるようになってきた。すなわち柴田幹夫編『大谷光瑞とアジア』（二〇一〇年 勉誠出版）や、同編『大谷光瑞——「国家の前途」を考える』（二〇一二年 同）などに見られる一連の研究である。このたび柴田幹夫氏が著わされた本書は、その大谷光瑞個人の研究やその諸活動の研究に関する初めての単著であり、長年大谷光瑞研究に携わってこられた柴田氏の研究の集大成ともいえるものである。そこでは多岐にわたる大谷光瑞の諸活動がとくにアジアとの関連において、なかでも中国との関連において論じられている。

ここではまず本書の目次を紹介し、次いで各章の内容の概略をうかがい、のちに本書刊行の意義について述べてゆきたい。なお本書は、柴田氏が二〇一三年に広島大学に提出された学位論文に加筆修正をおこない、また新たな論文を加えて刊行されたものである。

序章

第一部 大谷光瑞とアジア

第一章 大谷光瑞とロシア——ウラジオストク本願寺をめぐる

第二章 大谷光瑞と満洲

第三章 大谷光瑞と上海

第四章 大谷光瑞と漢口

第五章 大谷光瑞と台湾——「逍遙園」を中心として

第六章 大谷光瑞とシンガポール本願寺

第二部 大谷光瑞の中国認識

第一章 辛亥革命と大谷光瑞

第二章 大谷光瑞と『支那論』の系譜

第三部 大谷光瑞と周辺の人々

第一章 水野梅暁と日満文化協会

第二章 『萬里獨行紀』と中島裁之

終章

付録 大谷光瑞年譜 史料・参考文献

あとがき

索引

第一部大谷光瑞とアジアでは、本願寺派のアジア諸地域での開教（布教）の様子と、それら地域での大谷光瑞の活動の諸相、およびそれら地域に対する大谷光瑞の認識の仕方が論じられている。まず第一章大谷光瑞とロシア——ウラジオストク本願寺をめぐるでは、本願寺派のアジア開教の嚆矢となったウラジオストク（浦潮）本願寺について論じられており、とくに日露戦争時に邦人救護にあたった太田覚眠の業績が紹介されている。このウラジオストク本願寺の建設にあ

たつては境内地の土地問題が生じたが、大谷光瑞はそのことを時の外務大臣に陳情書を出すことによって外交問題化させ、解決に導いている。このことを柴田氏は大谷光瑞の慧眼として本章において紹介されている。また大谷光瑞はウラジオストクの重要性を早くから認識しており、日本海を取り囲むように朝鮮半島、大連、旅順、青島、上海、そして台湾、南方へと続くひとつの要衝として、その存在を考えていたのではないかとも指摘されている。

第二章大谷光瑞と満洲では、大連の本願寺派関東別院の日露戦争下での活動が論じられ、また別院における布教や教育事業などが、多くの資料に根拠づけられ紹介されている。大谷光瑞の満洲における活動はこの関東別院を拠点としてなされてゆくが、本章では大谷光瑞と満鉄との関係や、大量の蔵書を譲り渡した満鉄大連図書館との関係、大谷探検隊が将来した考古文物を寄託した旅順博物館との関係、さらには敗戦時の大連からの光瑞の引き揚げをめぐる一連の動きなどが論じられている。また大谷光瑞は満洲について、肥沃な土地と豊富な資源、それに完備された都市大連や満鉄を有する有望な地であると捉えていたが、反面人材不足や政体の不安定さにおいて、まだ課題が残されているとも認識していたことが指摘されている。

第三章大谷光瑞と上海では、本願寺派の華中華南方面の開教の中心であった上海別院の活動を紹介するとともに、上海別院のインドアジャンター式の本堂や、本堂に隣接して建てられたインドブッダガヤの大塔を模した仏塔の建設に、光瑞は自身の理想郷を実現してゆこうとしたのではないかと推測されている。また本章では、大谷光瑞の上海における広大な邸宅であった「無憂園」についても紹介されている。大谷光瑞の上海観については、光瑞は上海が将来東京、大阪、京都等を凌ぐ、アジアの政治工業商業航運および学術の中心都市となると認識しており、ロンドン、パリ、ニューヨークと相競う大都市となると予想していたことも指摘されている。さらに大谷光瑞と孫文との交流についても論じられているが、そこでは大陸において活躍した水野梅暁が紹介され、水野と光瑞との関係も考察されている。

第四章大谷光瑞と漢口では、まず漢口の地勢的な優位さが論じられ、それゆえ大谷光瑞はいち早くこの地の重要性を認識し、初めての外遊でこの地を選び訪問したとされている。また「国家の前途」を考えた大谷光瑞にとって、湖広総督張之洞が武漢においてすすめた「殖産興業」「富国強兵」の政策は大いに学ぶべきものであり、このような漢口を重視する立場より、漢口出張所を本願寺派の中国開教の中でも早い時期に

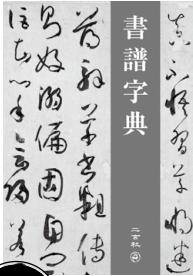
開設させていったと指摘されている。なお本章には付録として大谷光瑞が初めて漢口を訪問した際の三つの記録（清国巡遊誌『教海一瀾』『外遊記稿』）の記述比較が掲載されており、光瑞の漢口とのかかわりを知るうえで有益なものとなっている。

第五章大谷光瑞と台湾——「逍遙園」を中心としてでは、本願寺派の台湾開教が日清戦争に従軍した従軍布教使によって開始されたことが論じられている。またその後の開教事業では、台湾先住民への布教において、布教使たちは宗教者として総督府の方針に反する行動をとることもあったと述べられている。大谷光瑞の台湾訪問は法主退任後であったが、台湾のなかでもとくに光瑞は高雄の地を高く評価し、のちに自らの別邸である「逍遙園」を建設している。本章では「逍遙園」での大谷学生と呼ばれた門下生との生活の様子や、大谷

農園における熱帯農業の事業についても論じられており、また別邸「逍遙園」の建築物としての歴史的価値や本願寺「飛雲閣」との類似性も詳述されている。この「逍遙園」の建物については、現在高雄大学建築系の研究者たちによって文化財としての保存運動がおこなわれており、柴田氏もその運動を日本側より支援されている。

第六章大谷光瑞とシンガポール本願寺では、日清戦争後の早い時期より本願寺派のシンガポール開教がなされていたことが紹介されている。シンガポール布教所は日本軍の占領後、別院に昇格し昭南別院となるが、そこでの活動についても言及されている。このような本願寺派のシンガポール開教に関する研究はこれまであまりなされておらず、ここでの記述は研究上貴重なものとなっている。また大谷光瑞は早くからシ

●王羲之の正統を伝える草書名跡の字典！



好評
発売中

書譜字典

二玄社編集部編

A5判・176頁
●1200円＋税●

「書譜」の全字例を美しく配列したコンパクトな字典。個々の字形がつぶさに比較できるだけでなく、周囲の文字との繋がりも直ちに参照可能（各字例に『中国法書選』書譜』の頁と行を注記）。行草書を学ぶ者に必須の一冊。



二玄社

東京都文京区本駒込6-2-1
Tel.03-5395-0511 <http://nigensha.co.jp>

ンガボールに重大な関心を持っており、何度もその地に足を運んでいるが、本章では光瑞のシンガポールへの深い思いや、シンガポールでのゴム園の経営なども紹介されている。なお日本軍の占領後、軍は大谷光瑞にマレー半島の善後処理についての助言を求めているが、それに対し光瑞が日本帝国の優位さを内容とする方案を策定し、軍に提出していたことも紹介されている。

第二部大谷光瑞の中国認識では、大谷光瑞と辛亥革命との関わりや、光瑞の著わした『支那論』をとおして光瑞が中国をどのように捉えていたかが論じられている。第一章辛亥革命と大谷光瑞では、辛亥革命時本願寺派が官軍両軍双方を支援したことが論じられている。そしてそれは事態がどのように推移しようとも、その後の中国政局に一定の発言力を持ち、かつ中国を本願寺派の自立した布教の場としておこうとした、大谷光瑞の意図によるものであったことが指摘されている。また第二章大谷光瑞と『支那論』の系譜では、竹越三郎、山路愛山、大谷光瑞、内藤湖南の『支那論』が概括されており、光瑞はアジア主義的な考えより中国を捉えようとしていたことが指摘されている。

第三部大谷光瑞と周辺の人々では、水野梅暁と中島裁之の二人の人物に焦点が当てられ論じられている。第一章水野梅

暁と日満文化協会では、自らの使命を日中の仏教を結合させることとしていた水野の人物像と、水野が満洲国における文化政策に寄与するために設立した日満文化協会について詳述されている。第二章『萬里獨行紀』と中島裁之では、大谷光瑞の初めての清国巡遊に随行し、また中国での初めての本格的な日本語学校である「北京東文学堂」を設立した、中島裁之について紹介されている。また中島の中国旅行記である『萬里獨行紀』の内容の紹介を通じて、一九世紀末の中国社会の一端も垣間見せてくれている。

本書は柴田氏自身も述べているように、一九世紀末から二〇世紀中葉にかけてアジア広域に足跡を残した大谷光瑞という一人の日本人の行動を、アジアの諸地域とアジア近代史とのなかに位置づけてゆこうと試みたものである。その試みは膨大な文書等の資料の掘り起こしと、それら資料に裏付けされた分析力とによって、見事に本書において結実している。また本書は大谷光瑞個人に関する専著であるが、冒頭でも紹介したように、すでにそのことに関しては柴田氏編による二冊の研究書が刊行されている。そこでは全部で三二人の研究により、のべ三八本におよぶ論文やコラムが提出されている。これだけでも大谷光瑞個人の研究において泰山をなしているといえるが、本書はその研究をさらに進めたものであり、

大谷光瑞研究史上多大な意義を有するものであるといえる。

さらに本書第一部は、大谷光瑞を通してみたすぐれた近代本願寺派のアジア開教史研究ともなっている。本願寺派のアジア開教に関してはこれまで『浄土真宗本願寺派 アジア開教史』（二〇〇八年 本願寺出版社）などが刊行されてきているが、本書は新たな視点よりさらに本願寺派のアジア開教研究を前進させたものであり、その点においても研究史的意義を有している。

柴田氏は本書あとがきにおいて、若き日に自ら経験したひとつのエピソードを紹介されている。すなわち大学院修士論文の口頭試問において、主査の谷川道雄先生から次のように指摘されたという。「飯粒はしっかりと押さえることによって糊となるが、君のはしつかりと押さえていないので、糊とはならず、直ぐに剥がれてしまう」。本書はこの恩師の指摘に対する柴田氏のその後の真摯なる返答ともなっている。

（のせ・えいすい 龍谷大学）

二〇一四年日韓国立博物館合同企画特別展
「東アジアの華 陶磁名品展」

本展覧会は、日本、中国、韓国の3カ国の国立博物館が合同で実施する初めての国際共同企画展です。

中国は中国国家博物館、韓国は韓国国立中央博物館の所蔵品、日本からは東京国立博物館の所蔵・寄託品、文化庁の所蔵品と、各国15件ずつ、あわせて45件が出品されます。各館の陶磁器コレクションの特徴をふまえて厳選された名品が一堂に会します。

☆みどころ…日本——名品でたどる日本陶磁の歴史 中国——唐時代の出土品、唐三彩を中心に 韓国——充実の高麗青磁コレクション

▼会期…9月20日（土）～11月24日（月・休）▼会場…東京国立博物館 本館特別5室（上野公園）▼開館時間…9時30分～17時（入館は閉館の30分前まで。会期中の金曜日および、10月4日（土）、5日（日）、11月1日（土）、2日（日）は20時00分まで、10月10日（金）、11日（土）は22時00分まで。土・日、祝休日は18時00分まで開館）▼休館日…月曜日（ただし10月13日（月・祝）、11月3日（月・祝）、11月24日（月・休）は開館、10月14日（火）、11月4日（火）は休館）▼共催…東京国立博物館、中国国家博物館、韓国国立中央博物館▼料金…一般六二〇円、大学生四一〇円▼お問い合わせ…03-5777-8600（ハローダイヤル）